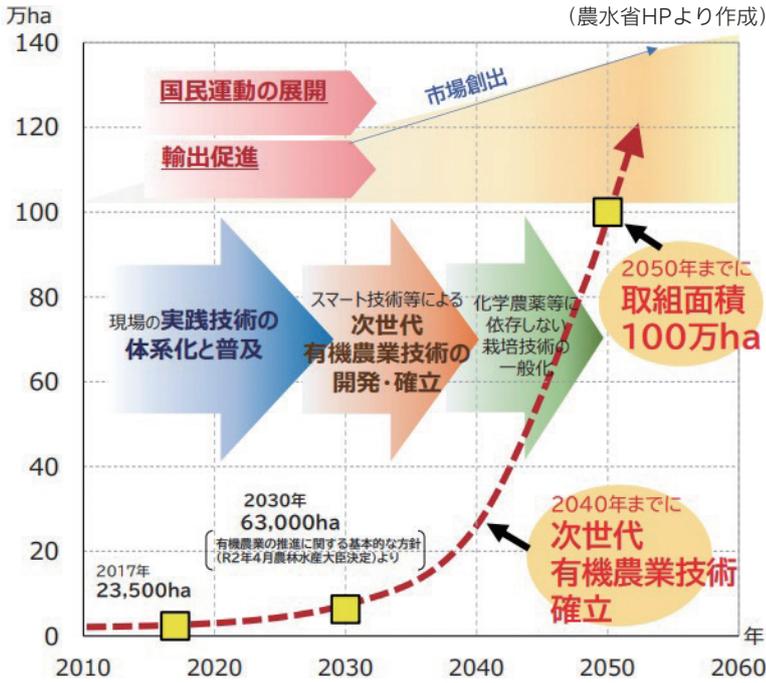


# 営農情報



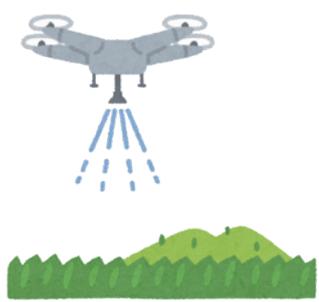
お盆過ぎから始まった水稲の刈取作業は概ね順調に進み、本年産米の収穫作業が終わろうとしています。本年の生育期間中も気象の変動が激しく、急な雨雲の発達が深刻な生活被害をもたらすこともありました。気象災害のニュースに接するたびに気候変動を憂慮する声を聞くことが多くなったと感じます。「みどりの食料システム戦略」は、土地・水など自然資本に大きく依存する私たちの農業を守るための取組みでもあります。

## 有機農業の取組みの拡大



2022年6月に閣議決定され、「みどりの食糧システム戦略」に示された政府方針では、化学農薬・肥料の利用の低減、有機農業の推進、環境負荷低減効果の見える化の推進が打ち出されました。そのような中、日本の食糧生産を支える肥料原料の輸入は常態化しています(肥料用尿素の国内生産4%、リン酸アンモニウムと塩化カリウムの国内生産0%)。このたびの新たな方針で目指す持続可能な食糧システム構築のため、CO<sub>2</sub>ゼロエミッションの実現、化学農薬・化学肥料使用量の低減、有機農業取組み面積の拡大を目指すこととなります。

## 「みどりの食料システム戦略」と「土づくり」



## 水田雑草対策について

水田で生える雑草は、米の収穫前に種子をつけるものがほとんどで、目には見えにくいのですが秋には多くの雑草種子が地面に落ちます。稲刈り後の田んぼを放置すると、次作にはより多くの雑草が生える恐れがあります。来年に向け、今のうちに雑草を減らす取組みをしてください。

このような情勢を念頭に生産の現場について展望すると、有機農業は今後も重要で、「土づくり」のための取組みは欠かせないものと考えられます。この取組みを有効にすすめるには、地域の農林水産由来の未利用資源をはじめ、広く未利用資源を見つめ直し、その有効活用のための合意形成を図ることが必要です。

### 刈取り後の使用除草剤の例

薬剤名	適用雑草	使用量(10a)	使用方法	使用回数
ラウンドアップ マックスロード	1年生雑草	薬量200~500ml 水量50~100ℓ	水田刈後 雑草茎葉散布	1回
	多年生雑草	薬量500~1000ml 水量50~100ℓ		

●農薬使用前にはラベルをよく読んでください。ラベルの記載以外には使用しないでください。